慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佐分純一著『ジュリヤン・グリーン : 魂の遍歴』
Sub Title	Julien Green : Le Pèlerinage d'une âme (in Japanese), by Jun-ichi Saburi
Author	若林, 真(Wakabayashi, Shin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.132- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佐分純一著『ジュリヤン・グリーン——魂の遍歴——』

若林　真

本書の論旨は、著者の「まえがき」と「あとがき」とのあいだに過不足なくすっぽり収まっている——これが本書の長所でもあり、欠点でもあるだろう。個人的体験に裏打ちされた共感から出発して私淑している作家を浮彫りにする方法は、作家研究としていちばんまっとうな、実りの多い方法であると同時に、すくなからぬ危険をも伴っている。

語られる対象が語り手の内的世界にぐんぐんひきこまれていき、その両者が美しい融合をとげるのは、はなはだ感動的な光景であるが、そこには無理心中のやりきれなさもなくはない。

佐分氏の描いてみせたジュリヤン・グリーン像に、私が一方で共感をおぼえながらも、他方では不満をかくしえないのはそのためである。著者の手にしたのみは執拗にセレニテの作家グリーン像を彫りつづける。だが、Ⅰ「生いたちと境遇」、Ⅱ「アメリカ南部の土」、Ⅲ「作品展望」、Ⅳ「生活と日記」、Ⅴ「告白の境地」へと章をたどっていくにつれ、いつの間にかこのアングロ・サクソン系のフランス作家は、東洋の仙人の風貌をおびてくる。グリーンはたしかにセレニテの作家には相違ないが、日本語でいう「静寂」の作家ではあるまい。地上のもろもろに肯を向けるということは、グリーンの場合、ひとつの断乎たる拒否、ひとつの意志的な態度であって、い

わゆる地上からの逃避ではなかったはずだ。

一例をあげよう。一九二九年の日記に次のような一文がある。

「作品の名に値する作品は、それをつき動かしている精神によって、その時代につながっているのだ。ある作品が一九二八年のものだということは、工場の煙突や短い髪の女が描かれているからではなく、作品の根底をなすもの、不安とか反抗の欲求などが描かれているからである。」

アンドレ・ジィドの家でマルローやエマニュエル・ベルルを前にした語ったこの言葉は、グリーンの現代作家としての信条を語ったものと解してさしつかえなかろう。小説のアクチュアリテは、取材された事がらの現代性（たとえば工場の煙突や短い髪の女というふうな）によるのではなく、時代の不安や反抗の欲求をいかに的確に深く把握するかにかかっている、だから小説のために選ばれた舞台・時代などは技葉末節にすぎないと、グリーンは主張しているのだ。ところが佐分氏は同じ引用文をふまえながら、「工場の煙突や短い髪の女」というような言葉を括弧でくくって、そこにグリーンの物質文化への嫌悪を見ている（本書四十ページ）。ここに著者のグリーンへの偏った好みを見るのは私の誤解だろうか？　私個人はグリーンのなかに、きわめてアクチュエルな作家を見ることを好む。『モン＝シネール』や『アドリエンヌ・ムジュラ』などの世界は、たとえばアンガジェの作家サルトルの『出口なし』のように、出口のない現代人の在り方と、閉鎖的な歴史の状況を象徴しているように見える。また『真夜中』は、カフカの『城』と同じように現代の不条理を象徴しているのであろうし、フォンフロワードの館の主人、夜と昼、死と生とをとりちがえているあのエドムから、われわれはナチス・ドイツの独裁者を想像できないこともない。ジィドから「きみは非政治的だが、そのままでいたまえ」と言われたグリーンもまた、その趣きは異るにしろ、モーリヤック、ベルナノス、マルローなどと同じように、その時代に全身を賭けて、積極的に参加した作家だと、私は理解したい。グリーンに捧げられた「参加の魂（ラーム・アンガジェ）」という言葉の、もうひとつの意味もそこにあると思う（本書三ページ参照）。

もちろんこれは好みの相違かもしれないが、せっかく異を唱えたついでに、もう一例とりあげさせていただく。本書七七ページで、親を失った子供の悲嘆を説明するために、著者は丹羽文雄の『菩提樹』の冒頭を引用しているが、私にはグリーンと丹羽文雄との対比

があまりに唐突に見えるのである、浄土真宗の作家とカトリック作家との対比が。この引用が単なる比喩であるとすれば、がんらい記述的であるべきこの種の研究には余計なもの、刈りとるべきものであろうし、もし本論の結構のために必要であったのだとすれば、著者のグリーンへの偏った好みの証しとなるだろう。

以上多くの不満を述べたが、ひとりの作家に長年にわたって心血を注ぐということは並々ならぬ忍耐と愛情を要することであり、その成果を一書にまとめて公表するにいたった著者の労を多としたい。そして第六章の「年譜および参考文献」は量質ともにいまの日本でわれわれが望みうる最高のものであり、今後のグリーン研究に益するところ大であろう。

（慶応義塾大学法学研究会叢書別冊Ⅰ・慶応通信株式会社刊・二〇二頁・定価九〇〇円）